

新型コロナ にかかった人 どう思いますか

通信もずいぶん授業づくりから離れてしまいました、すみません。今回も授業づくりとは違って、新聞記事の一つ紹介します。令和3年12月8日付け朝日新聞の和歌山版に九度山町の中学3年生が書いた少年メッセージが紹介されていました。見平愛心さんは、今年度の県大会で銀賞を獲得しています。弟が新型コロナウイルスに感染し、その時の悔しさや思いやが中学生の目線で描かれています。中学生がどのように感じ、苦悩しているのか作文の中の言葉から感じ取ってもらえたらと思います。(記事は裏面に記載。)

「コロナ差別」に対する私の想い

あみ
見平 愛心

もし、あなたの周りで新型コロナにかかった人がいたら、あなたはどう思いますか。あなたはその人にどう接しますか。

新型コロナウイルスの感染者が増え続けているなか、感染者や家族への誤解や偏見による「コロナ差別」が、さまざまところで起こっています。咳をただけで感染者と疑われる人や、医療従事者の家族というだけで子供を預けないよう求められる人など、感染者だけでなく多くの人々が新型コロナを巡り、周囲の差別や無理解に苦しんでいます。

私も以前は、近くで誰かが咳をしていたら少し離れたり、感染者について根拠もないのに自業自得の部分もあるのではないかと思ったりしていました。けれど、そのような自分の偏見を一変させる出来事が起こったのです。

今年の2月に弟の通っている保育園で新型コロナウイルス感染症のクラスターが発生し、弟は感染者となってしまったのです。弟の感染が分かってから、あらゆることが制限されました。私たち家族も濃厚接触者として、3週間ほど自宅待機を余儀なくされました。家から一歩も出ることができず、食料なども買いにいけなかったため、祖母らに頼るしかありませんでした。とても辛く、大変でした。けれど、それ以上に辛かったことがありました。

弟が新型コロナに感染したことで、濃厚接触者となった私も学校へは行けません。勉強も部活のソフトテニスもできないことへの焦りから追い詰められ、私は家族の前で泣きました。それを見た弟はみんなの前で、

「俺のせいでごめん。」

と謝りました。その時、私は自分のことだけ考えて泣くという最低なことをしていると気づきました。

「ごめんね。」

そう言って家族みんなで泣きました。誰も悪くないのにどうにもならないということが私たち家族にとってつらいことでした。

けれど、自宅待機中に感じたのは、辛いことばかりではありませんでした。多くの人に助けをもらい、うれしいこともたくさんありました。担任の先生は電話をしてくれ、私の話を真剣に聞いてくれました。友達は休んでいる間の授業のプリントの写真を送ってくれました。また、待機期間を終えて学校に行くと、どの先生も笑顔で私に話しかけてくださり本当にうれしかったです。

今回の出来事を通じて、大きく二つのことを私は学びました。感染者やその家族が、感染に対して罪悪感を持ち、3週間という長い自宅待機を苦しんで生活しているということ。そして、苦しい生活をしているからこそ、周囲の人々が理解をして行動してくれることがとてもうれしく心強いということです。

新型コロナウイルス感染症は未だ猛威を振るい、日本だけでなく世界中でウイルスに対する不安や恐れが広がっています。そのことから、感染者やその家族、ついには特定の人種に対する差別的な行動につながっているとの報道がされています。不安や恐れは身を守るために必要な感情ですが、過度な不安や恐れは他者への理解を難しくさせます。そして、多くの人々を攻撃させてしまうのです。

今を生きる私たちは、この新たなウイルスによって互いに距離を保つことが求められます。しかし、「人を思いやる心」まで忘れてはいけません。皆さんが闘う相手は感染してしまった「人」ではなく「ウイルス」です。これは、新型コロナがもたらすものを肌で感じた私だからこそ、伝えられることだと思います。どうかウイルスを正しく恐れ、感染者やその周囲の人々に対し、偏見による差別をしないでください。そして思いやりの心をもって接してください。これが「コロナ差別」に対する私の想いです。